2021年度 文部科学省委託事業

専門学校における先端技術利活用実証研究

日本語教育のための効果的な遠隔授業モデル構築プロジェクト

事 業 報 告 書

2022 年 3 月

学校法人文化学園

文化外国語専門学校

はじめに

本報告書は、2021 年度文部科学省委託事業「専修学校による地域産業中核的人材養成」において、学校法人文化学園文化外国語専門学校が受託した「日本語教育のための効果的な遠隔授業モデル構築プロジェクト」の今年度活動成果をまとめたものである。

新型コロナウィルス感染症（COVID-19）が世界中で猛威を振るい、我が国でも 2020 年４月に緊急事態宣言が発令された。人と人との接触を控えることが推奨され、同じ空間を共有してのコミュニケーションも難しくなった。生活様式は一変し、外出自粛によって街からは人が消えた。普段は多くの学生が行き交い、若い力が横溢する学校においても、無論、例外ではない。

これまで、国の単位認定基準は対面を前提として運用され、多くの学校教育の現場では集合教育における授業が展開されてきた。しかし宣言直後においては、学校種に関わらず多くの教育機関が学校閉鎖、登校自粛を決断せざるをえず、教育活動の抜本的な見直しが求められる事態に陥った。宣言が解除となっても分散登校が実施されるなど、新たな生活様式における学校生活や教育水準の維持を模索する日々が続いている。

この未曾有の事態において、教育を停滞させることのないよう取り入れられたのが、オンライン授業や LMS（Learning Management System）など、先端技術を活用した新たな学習手法である。コロナ禍以後、多くの教育機関はデジタルツールを活用し、変化する社会情勢にも柔軟に対応していった。2022 年 3 月現在、未だ COVID-19 の終息は見られないものの、徐々にこの新たな手法が浸透していっている。

当プロジェクトが取り扱う日本語教育分野は、留学生に対する学びを提供する分野である。日本国内の感染状況が落ち着き、徐々に対面授業が再開される状況であっても、海外由来とされる COVID-19 の性質上、留学生の入国すら慎重な対応にならざるを得ない。未だに入国が叶っておらず、自国に留まることを余儀なくされている留学生は多い。そういった留学生への学びの提供手段として、学ぶ場所を問わないオンライン授業は、もはや当分野において必須といってよい。

言うまでもなく、コロナ禍では日本語教育機関においてもデジタルツールを活用したオンライン授業が展開されてきた。しかし、モデルやメソッドが確立されてはおらず、「効果的」と言える手法も提唱されていない。本プロジェクトでは、日本語教育における効果的な遠隔授業の手法を検討、実践し、当分野全体の発展に寄与するモデルを確立することを目指していくものである。

2022 年３月

日本語教育のための効果的な遠隔授業モデル構築プロジェクト実行委員会

主幹校：学校法人文化学園 文化外国語専門学校

目 次

はじめに 2

目　次 3

・プロジェクト委員会構成
・プロジェクト実施体制　／　会議スケジュール

１．プロジェクトの取組概要 6

1-1. 本事業における背景と目的
1-2. 効果的な日本語教育における遠隔授業を実現するために
1-3. 遠隔授業モデルの設定と運用
1-4. プロジェクト活動計画
1-5. 日本語教育の特徴と、期待される課題解決

２．2021 年度 活動報告　－ 教員へのアンケート調査 － 20

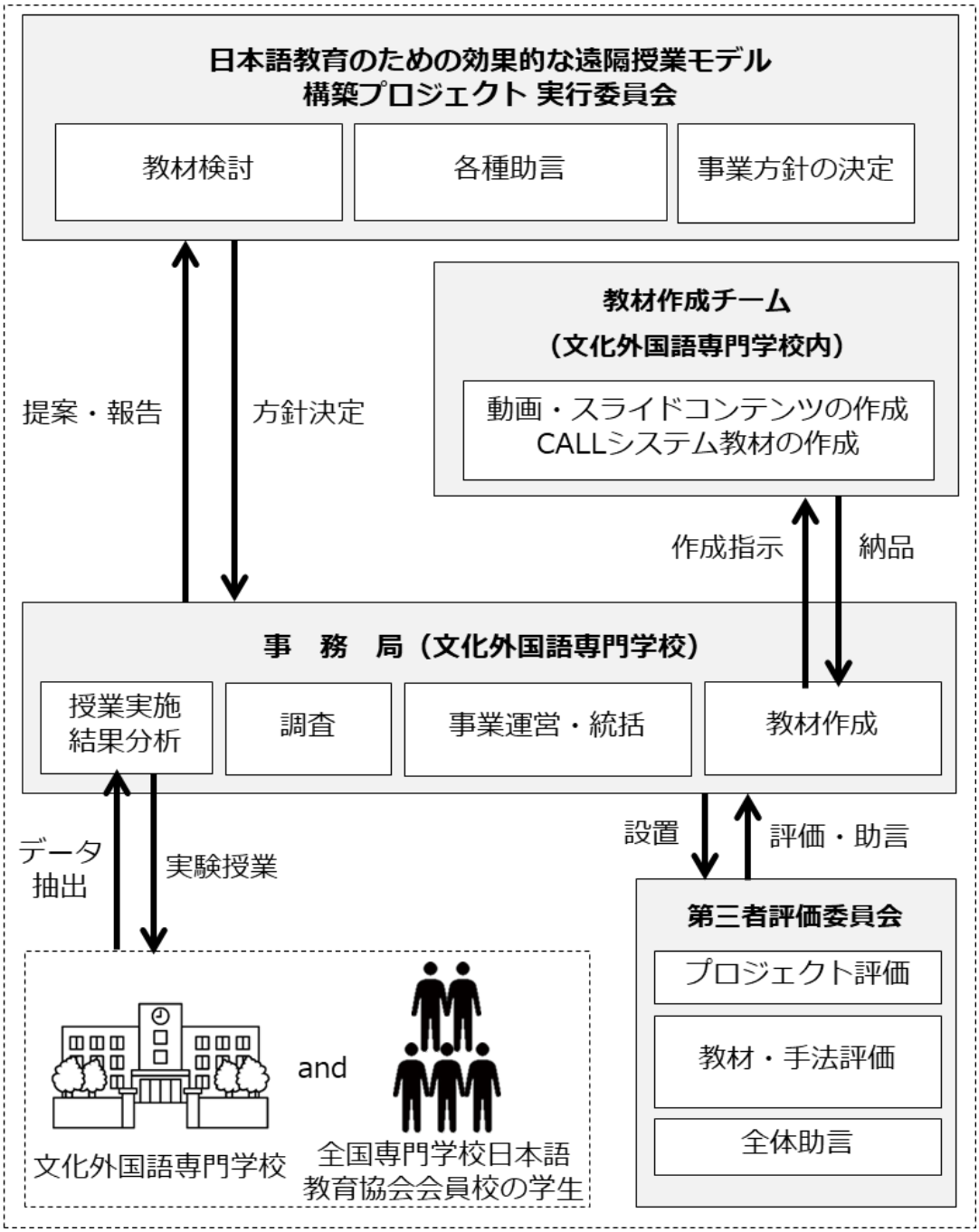
2-1. 2021 年度に行った活動について
2-2.「学内教員アンケート」実施報告
2-2-1. 調査概要
2-2-2. 調査結果及び考察
A. 初級の予習動画について
B. 初級の反転授業について
C. 遠隔授業における教育活動
（授業・課題・教材・学生指導など全て）について
D. 学生のことについて
（参考資料）学内教員アンケート質問事項

３．まとめと今後の方向性 45

プロジェクト委員会構成

氏　名	所属・役職	役　割
西村　学	学校法人文化学園 外国語専門学校 副校長 教務部長	委 員 長
白岩　麻奈	学校法人文化学園 外国語専門学校 専任教授	教材作成委員
秋村　ひかる	学校法人文化学園 外国語専門学校 専任講師	教材作成委員
鎌田　智瑛	学校法人文化学園 外国語専門学校 専任講師	教材作成委員
斉藤　佑太朗	学校法人文化学園 外国語専門学校 専任講師嘱託	教材作成委員
小山　千恵	学校法人長沼スクール 東京日本語学校 理事・校長	実行委員会委員
加藤 正毅	学校法人深堀学園 外語ビジネス専門学校 ICT 推進室長	実行委員会委員
金田 智子	学校法人学習院 学習院大学文学部 日本語日本文学科 教授	実行委員会委員
小河原 義朗	国立大学法人東北大学大学院 文学研究科 日本語教育学専攻 教授	実行委員会委員
古屋 和雄	全国専門学校日本語教育協会 理事	実行委員会委員
三浦 一生	ICHIGOICHIE CONSULTING, Inc.代表取締役社長	実行委員会委員
松尾　花穂	株式会社アスク出版 日本語編集部チーフ	実行委員会委員
竹内　孝太朗	モノグサ株式会社 代表取締役 CEO	実行委員会委員
渡部 唯広	株式会社凡人社 編集部 編集長	実行委員会委員

プロジェクト実施体制



委 員 会

第１回　2021 年 11 月 16 日（火）16:30 ～ 18:30　　於：学校法人文化学園

第２回　2022 年 1 月 31 日（月）16:30 ～ 18:30　　オンライン会議

第３回　2022 年 3 月　3 日（木）16:00 ～ 18:00　　オンライン会議

１．プロジェクトの取組概要

１-１．本事業における背景と目的

我が国の日本語教育の役割

現在の我が国における留学生政策は、1983 年に中曽根康弘内閣により推進された「21 世紀の留学生政策に関する提言」（通称：留学生受入れ 10 万人計画）を基本枠組みとしている。当時、日本の留学生受入れ数は他の先進国と比べて際立って少ないことが指摘されている状況にあったなかで、「留学生交流は、我が国と諸外国との相互理解の増進や教育、研究水準の向上、開発途上国の人材育成等に資するものであり、我が国にとって留学生政策は、文教政策及び対外政策上、重要な国策の一つ」とされ、以後さまざまな施策が実行へと移されていった[※1]。当時はさまざまな分野において「国際化」がキーワードとなっており、この提言ははじめて高等教育レベルでの教育、研究分野における国際理解、国際協調の推進、途上国の人材育成協力の観点から、総合的な留学生政策として打ち出されたものである[※2]。

2008 年には、福田康夫内閣のもと「留学生 30 万人計画」が発表され、その名の通り、2020 年を目途に留学生 30 万人受入れを目指す方針が掲げられた。文部科学省をはじめ関係省庁によりまとめられた「『留学生 30 万人計画』 骨子」[※3]には、「我が国への留学生についての関心を呼び起こす動機づけから、入試・入学・入国の入り口から大学等や社会での受入れ、就職など卒業・修了後の進路に至るまで、体系的」な方策を実施することが示されている。具体的には、誘致戦略として「我が国の文化の発信や日本語教育の拡大により、日本ファンを増やして我が国及び大学などへの関心を呼び起こ」すこと、「海外の大学等と連携して効率的に日本語教育拠点を増加させることにより、海外における日本語教育を積極的に推進」することが掲げられ、また受入れ環境づくりとしては「留学生が留学後困らないよう、日本語教育機関・大学などの日本語教育担当部署をはじめとした国内の日本語教育の充実」（注：下線は筆者）を推進することが明記された。日本語教育は、我が国のグローバル戦略の一翼を担う重要な要素として定位している。

計画目標の 1 年前倒しとなる 2019 年には、留学生在籍者数 312,214 人を達成したことが、日本学生支援機構『外国人留学生在籍状況調査』で明らかとなる[※4]。2011 年に発生した東日本大震災で一時減少した留学生数であったが、その後日本語教育機関等における積極的なリクルート活動や、多くの施策が直接、間接的に留学生の増加に寄与したと言える。

新型コロナウィルス感染拡大における諸状況

グローバル化が推進され、インバウンドにおける経済的な好循環も定着していたなか、2019 年末に新型コロナウィルス感染症（COVID-19）が海外において確認された。日本では、2020 年 1 月 15 日に最初の感染者が確認され、以後大型クルーズ船での感染者確認やイベント内でのクラスター発生、医療機関での院内感染などがセンセーショナルに報じられ、国民の危機感は日に日に高まっていった。同年 2 月末には、当時の安倍晋三首相による全国小中学校への一斉休校が要請されるなど、その影響は教育機関にも及んだ。3 月 13 日には新型インフルエンザ等対策特別措置法が改正され、翌日より施行される。そして同年４月７日、安倍首相は東京、神奈川、埼玉、千葉、大阪、兵庫、福岡の７都道府県に緊急事態宣言を発令し、４月 16 日には対象地区を全国に拡大した。

当然、この厄災はダイレクトに留学生数にも影響を与えた。COVID-19 が世界規模の猛威を振るった 2020 年の留学生数は、前年度の約 10%減となる 279,597 人[※5]。さらに、感染拡大防止の観点から、外国からの日本への入国禁止あるいは制限がされ、本来日本に来て学ぶはずであった留学生が渡日できない状況に陥った。海外由来とされているこの COVID-19 への対策として、国は当初から外国人受け入れを制限する処置を、緩急つけながら行ってきた。海外からウィルスが流入する危険性を排除するための、やむを得ない防衛措置である。2020 年 10 月に入国制限が緩和されたものの、その後再びの緊急事態宣言などを受け、困難な局面となった。2021 年に入っても留学生が日本に来ることが難しい現状となっている。本プロジェクトの主幹校である学校法人文化学園文化外国語専門学校に４月に新規入学予定であった諸外国からの留学生は、5 月 31 日時点で 1 名も入国できていない状況であった。

専門学校の日本語教育における現状

緊急事態宣言を決定機とし、日本は外出自粛、人と人との直接的な接触を控えることの推奨、マスク着用、飲食店の営業自粛（短縮）要請など、人々の生活、社会活動は一変した。当然、教育現場においてもそれは例外ではなく、先ほどの小中学校への休校要請を先例に、各学校が学校閉鎖を余儀なくされた。多くが入学式を取りやめる事態となり、学校運営者は４月以後の教育活動をどのように進めていくかの対応に追われた。その中で、ほとんどの教育機関が取り組んだのが、オンラインにおけるデジタルツールを活用した学習方式である。

デジタル需要の高まりは、コロナ禍よりもずっと以前から、産業界を中心に盛り上がりは見せていた。しかし、かつての日本はIT先進国として世界をけん引する存在でもあったが、今では諸外国と比べてデジタル化が進んでいないということが指摘されており、行政や教育環境においては特に遅れていることが問題視されていた。それが今般の有事において表面化し、あらゆる面で見直しが必要という声の高まりにより、必然的に教育現場にも機運が高まることとなった。もともと日本においては、ITを活用した人材育成計画が2000年代初頭のe-Japan戦略を皮切りに進められてきたわけだが、それが真の意味での実現までには至っていなかった。それが今回、奇しくもCOVID-19によって急速に進む結果となったわけである。

日本語教育機関においてもオンライン授業における検討が進められ、授業に落とし込まれていった。この間各学校で取り入れられたオンライン授業ツール、LMS（Learning Management System）をはじめとした支援ツール、アプリケーション、デジタル機材などを組み合わせながら、遠隔授業が展開されてきている。しかし、急速に進んだDX（デジタルトランスフォーメーション）により、学校現場においてはそのインフラ整備や、学生への個別相談などの業務に忙殺された。いかに教育活動を成立させるかに苦心し、授業の質を具に検証する時間が確保できておらず、多くの学校の悩みの種となっている。

再び日本のグローバル戦略を加速させるためには、現在の状況でも教育の質を確保し、学びの環境を維持していくことが重要であることは言うまでもない。それにより、諸外国の留学予定者の信頼を勝ち取り、コロナ収束後に安心して留学してもらうことが、日本語教育機関としての責務と考える。教育の質を落としたり、留学生の日本に対する関心を低下させることなく、遠隔授業を通じて高い水準の教育を実現できる日本語教育モデルの確立が求められている。

※1 「留学生受入れ10万人計画」
（https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/007/gijiroku/030101/2-1.htm）参照

※2 武田里子「日本の留学生政策の歴史的推移―対外援助から地球市民形成へ―」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』No.7,p77-88 2006

※3「留学生30万人計画」
（https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/__icsFiles/afieldfile/2019/09/18/1420758_001.pdf）参照

※4 日本学生支援機構「2019（令和元）年度 外国人留学生在籍状況調査結果」

（https://www.studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2020/08/date2019z.pdf）参照
※5 日本学生支援機構「2020（令和 2）年度 外国人留学生在籍状況調査結果」
（https://www.studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2021/04/date2020z.pdf）参照

１-２．効果的な日本語教育における遠隔授業を実現するために

専門学校における日本語教育

海外や日本の一部大学等において日本語教育の先行研究が進み、理想的な在り方についての提言がなされてきている。反転授業（ジョナサン・バーグマン アーロン・サムズ 2014[※5]など）をはじめとした授業実践は世界的な趨勢となり、国が推進する教材のデジタル化やデータにおける学生管理手法なども、効果的かつ効率的な手段として提案されてきた。しかし一方で、専門学校における日本語教育においては、各学校の規模や資金面、業務量など、さまざまな要因で教育改革が進まなかった現状にある。それが、先述のように 2020 年の COVID-19 の影響により、日本の学校教育全体がデジタル化を急加速させた。日本語教育分野においても、授業資料がデジタル化されたうえでオンライン授業などに活用され、授業データはアーカイブされるなど、今まで進まなかった教育改革が一気に進展する結果となった。

【表１】日本語教育の進展

	従来の専門学校の日本語教育	**効果的とされている日本語教育の例**
教育手法	講義形式 ＋ 宿題 or 課題	反転授業（予習 ＋ リアル教育）
教 材	紙ベース教科書・教材・黒板の板書	デジタル化された教材 授業データのアーカイブ化
学生管理	紙ベースのレポートやアナログな課題の提出	LMS を活用した学生管理システムの活用

	コロナ禍の専門学校の日本語教育
教育手法	対面を中心とし、一部デジタル化された授業
教 材	教科書に加え、デジタル化された教材・授業データのアーカイブ化が増加
学生管理	LMS を活用した学生管理システムの活用が増加

遠隔授業における日本語教育の可能性

日本語教育における遠隔教育およびそのシステムは、すでに多くの先行研究実践（木原郁子・板橋貴子・河住有希子・高邑真弓 2005※6など）があり、「これらでは概して（中略）有効性や利点が報告されている」※7。加えて日本語教育は反転学習と相性が良いとされ、先行研究（古川　智樹・手塚まゆ子　2016.6※8など）においてポジティブな結果が得られている。遠隔教育を用いた日本語教育はコロナ禍を契機として、動画やスライドなどの教材に活路が見いだされつつある。日本語教育で効果的とされる反転授業の観点を取り入れ、教材データや教科書、また日本語教育に特化した様々なシステムを遠隔授業に最適化させることで、専門学校における日本語教育の新たな学習スタイルとして定着させられる可能性を秘めており、検証実践する価値は大いにあると言える。

GoogleClassroom をはじめとした LMS の活用は、遠隔授業はもちろん、COVID-19 収束後であっても学習者管理には非常に有効と言える。過去の学習データや教材などにどこからでもアクセスでき、学生の学びの幅の拡張やフォローアップにも有効なツールと評価できる（「オンライン授業アンケート」文化外国語専門学校調査　2020 年度実施結果※9、金孝卿、山田真知子　2019 ※10など）。これらツールが今後さらに広がることで、日本語教育の発展が見込めるのではないか。日本におけるオンライン授業をはじめとしたデジタル化の素地は 2020 年度の 1 年間で整えられたといえ、次のステップとして「真に効果的な遠隔授業とは」の段階に入った。日本語教育において専門学校で育成された留学生の多くが、最終的に産業界へと輩出され、日本の国際競争力の向上にも期待される人材となる。

質の高い遠隔教育の実現のためには、教育界のみならず産業界の意見も取り入れた多面的かつ専門性を確保したチームで議論することが望ましい。そのような考えのもと、本プロジェクトでは日本語教育業界を支える多様な機関とコンソーシアムを結成し、効果的な遠隔授業モデルを構築していくこととする。

※５　ジョナサン・バーグマン　アーロン・サムズ『反転授業　-基本を宿題で学んでから、授業で応用力を身につける』オデッセイコミュニケーションズ　2014）

※６　木原郁子・板橋貴子・河住有希子・高邑真弓「遠隔日本語教育の試み-ビデオ会議システムを用いた授業-」『日

本語教育方法研究会誌 vol.12』日本語教育方法研究会 p6-7 2005

※7 村上智子「遠隔教育の有用性と問題点の考察-コロナ禍における遠隔による『インターアクション６」実践事例を通じて-」

（https://www.kandagaigo.ac.jp/kuis/cms/wp-content/uploads/2021/03/6.Murakami.pdf）参照 2021

※8 古川 智樹・手塚まゆ子「日本語教育における反転授業実践 -上級学習者対象の文法教育において-」『日本語教育 164 号』日本語教育学会 p126-141 2016

※9 学校法人文化外国語専門学校が 2020 年 10 月期入学者を対象にしたオンライン授業へのアンケート結果

※10 金孝卿、山田真知子「オンラインでのケース学習における学習者の学び -問題解決のための協働的なコミュニケーションに着目して-」『大阪大学国際教育交流センター研究論集 多文化社会と留学生交流』大阪大学国際教育交流センター p43-p52 2019

１-３．遠隔授業モデルの設定と運用

プロジェクトの目標設定

本プロジェクトは、**日本語教育における反転授業の観点を取り入れた効果的な遠隔教育を実現**することを目標とするものである。現在の社会的背景や、また今後も先行きが不透明な状況の中で、安定的かつ質の高い日本語教育が提供できるモデルを構築する。上記のように、コロナ禍における遠隔授業モデルが待たれる中で、全国の日本語教育機関が導入可能な汎用性のあるメソッドを考案すること、同時に反転授業の手法を用いた効果的な学習法を検討していく。

遠隔授業モデル構築のポイント

遠隔授業モデルにおいては、反転学習の観点を取り入れて運用することを想定する。また、日本語教育の可能性や将来性、学習効果検証を行うため、多様な教授法についても検討する。これまでの日本語教育の主流は文型積み上げ式であり、主幹校である文化外国語専門学校においてもこの教育法が採用されているが、行動中心アプローチの教授法や日本語教育の参照枠、CEFR など、遠隔授業モデルに最適な手法は何かを見極め、必要に応じてミックスするなど、あらゆる可能性を考えながら構築を進める。

開発するモデルの導入設定

本モデルの導入は、今般のような留学生が入国できない状況下で、自国あるいは自宅で質の高い日本語教育を受けることが可能な遠隔授業を想定する。

開発するモデルが想定する導入期間

入学直後の 3 か月間において活用できる遠隔授業を想定する。

モデル導入における対象者

Class	日本語能力試験受験レベル
初級	N4 ～ N3 レベル
中級	N2 ～ N1 レベル
上級	N１レベル

モデルの対象者は日本語能力レベル N４～N３の初級クラスを想定する。

想定される使用ツール・システム

Google Classroom（LMS）

➤ Google 社が提供する学習支援システム。本プロジェクトにおいて学生の学習・採点管理および教材などの授業データ管理に活用。課題提出やフィードバックでも使用

Zoom（遠隔授業ツール）

➤ Zoom 社が運用する遠隔会議ツール。本プロジェクトでは遠隔授業実践の際に使用

その他、自習ツール　※次年度以後、最適なツールを選択

授業準備

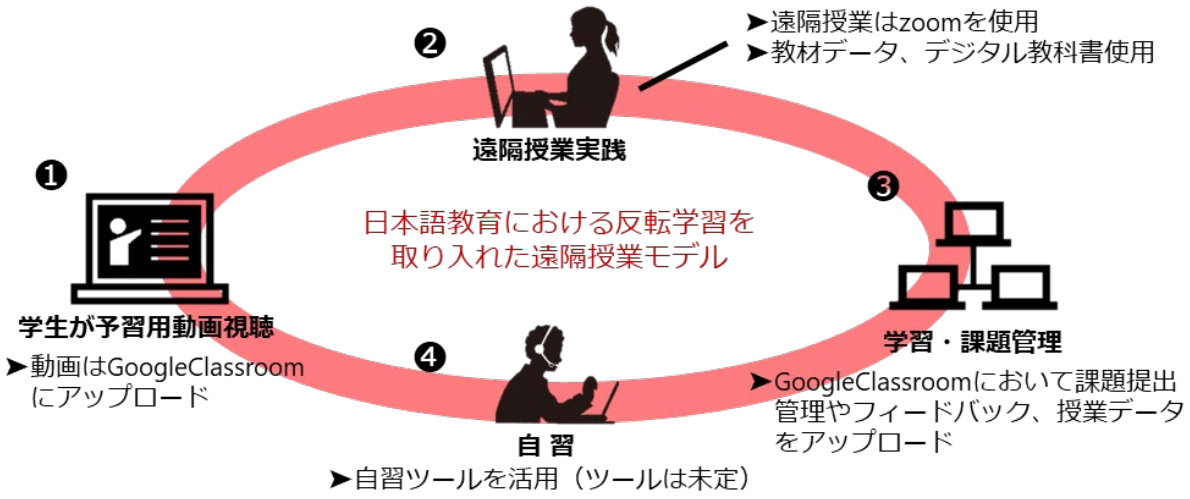
予習用教材として動画を作成するとともに、授業で使用する教材資料においても、原則デジタル化する。使用する機材やソフト、教材は以下を想定する。

教材作成➤PowerPoint（Microsoft 社）

動画作成➤PowerPoint（Microsoft 社）

教 科 書➤「文化初級日本語テキスト改訂版Ⅰ.Ⅱ」（デジタル版）

授業モデルイメージ（遠隔授業実践）



理解度テスト

四技能がバランスよく習得できているかの理解度テストを実施する。実施にあたっても完全オンライン

上で実施し、提出、採点、フィードバックも LMS などを活用して行うこととする。

まとめ作業

実践授業と理解度テストを受けて、モデル検証や修正、まとめ作業を行う。また、日本語教育機関が実際の現場で使用できるよう、活用マニュアルなどを作成する。労力やコスト、教育効果の適切なバランスを精査すると同時に、学校の IT インフラ、教員の IT スキル向上のための方策などもまとめる。

1-4．プロジェクト活動計画

本プロジェクトは、文部科学省委託事業「令和３年度 専修学校における先端技術利活用実証研究」において採択をされ、2021 年～2023 年度までの期間で事業を運用する計画である。事業全体を概ね５つのステップに分類して遂行していくこととする。

※太枠が今年度（2021 年度）の主な実施内容

【第１ステップ】 情報収集／ ニーズの把握／ 現状の把握／	・文献、資料、メディア記事、各種セミナーなどから、社会的現状や取組、日本語教育の最新情報などに対する収集を図る ・委員会において、蓄積している知識や情報、課題や問題点などを共有 ・各種アンケート調査を実施し、現状の把握を行う
【第２ステップ】 遠隔授業モデルの作成／ 授業教材等の開発 ※2022 年度も継続して実施	・第１ステップの情報や知見をもとに、遠隔授業モデルの内容を検討する ・文型積み上げ方式、行動中心アプローチ、日本語教育の参照枠、CEFR などの各特性を理解し、遠隔授業モデルに最適化した新たな学習方法を構築する ・遠隔授業で使用する教材や反転授業用予習動画を開発する
【第３ステップ】 モデルの実践／ モデルの検証／ モデルの修正	・第２ステップを経て構築された遠隔授業モデルを用いて、主幹校である学校法人文化学園 文化外国語専門学校において実践授業を行う ➤実践授業では、開発した教材や手法を用いた実証グループと、それらを用いない非実証グループにわけて検証する ➤効果検証には、「理解度テスト」「受講者アンケート」「教員インタビュー」「テスト結果精査」などを用いることとする ・検証結果をもとにモデルの修正を行う
【第４ステップ】 モデルの再実践／ モデルの再検証／ モデルの再修正	・第３ステップで修正されたモデルをもとに、再度実践授業を行う。実践授業は、全国専門学校日本語教育協会会員校の有志学生を対象とする ➤実践方法は第３ステップと同じ ・モデルの修正作業を行うほか、教育効果とコストとのバランス分析もおこなう
【第５ステップ】 成果のとりまとめ／ 成果の発信、普及	・遠隔授業モデルの成果物（予習用動画教材、授業資料データ教材、活用マニュアルなど）や、検証結果をまとめ、全国の日本語教育機関で活用可能なものとしてとりまとめを行う ・全国専門学校日本語教育協会会員校に成果を共有するほか、研究報告会などを通じて発信、普及を図る

1-5. 日本語教育の特徴と、期待される課題解決

以下のイメージは、日本語教育の特徴を COVID-19 以前、2020 年のコロナ禍、2021 年度以後に分けたうえで、本モデルの構築により期待される変化を示したものである。

従来の日本語教育

対面におけるアナログな学習方式

〇黒板や紙ベースの教科書＆資料を用いた対面方式

〇対面授業は円滑なコミュニケーションが促進され、教育効果もある

〇授業が学校完結型で、学生の事情に合わせた学びには限界がある

アナログな学習・生活管理

〇学生の学習管理や生活管理などを一元管理することは難しく、個別管理で時間が取られる

〇課題提出など、学生は授業がなくても登校を余儀なくされる

〇学校にいなければ、情報を得られにくい

Point

〇従来のアナログな方式は長い歴史の中で一定程度成熟していたものの、一方で多様な学びを実現することは難しかった

〇学校現場におけるデジタル化がなされてなく、教育の手法や教材のデータ化など、あらゆる面でアップデートが進んでいない。イノベーションが生まれづらい環境にあった

Before Covid-19（ - 2019）

新たな日本語教育

デジタル対応の学習方式

〇教材データなどをデジタル化することで常に最新の情報を簡単にアップデートできるため、コストを最小に抑えることができ、教員間のデータ共有もしやすい

〇授業データの保存が容易で、欠席や遅刻への対応もしやすく、学生の多様な学びを実現しやすい

〇様々なデータに素早くアクセスでき、学習の効率化や時間短縮など、教育の最適化が進む

学生管理をデジタルで一元化

1. with Covid-19（2020）

〇学生の課題提出など、LMS を活用して一元管理
〇学校に登校せずとも、情報の共有が可能になる

Point
〇コロナ禍でデジタル化が余儀なくされ、急ピッチで実装された遠隔教育は、学生の多様な学びを実現でき、今後の教育でも生かしていけるという実感を得ている
〇一方で、デジタル化における遠隔授業の効果検証に加え、ノウハウ、労力、時間、コストなどの具体的検証には至っていない

新たな日本語教育（構築モデル実証）

デジタルをフル活用した遠隔授業の実践
〇ネット環境さえあれば空間・時間を問わずに学習の場にアクセスでき、多様な学びをさらに促進
〇これまで実現しなかった反転学習の観点を取り入れ、遠隔授業でも質の高い教育を提供
〇教材データや授業動画など、教育をアーカイブして多様な学びの促進

LMS を活用し、学生管理の他、教育の質も向上
〇LMS の機能活用を拡大し、学生の学習ログ・採点管理やフィードバックなどにも使用
〇学校側は抽出したデータを活用して教材データや学生対応に反映させる

Point
〇デジタル化で教育改革が起こったことを契機に、プロジェクト内で遠隔教育における反転学習の観点を取り入れた日本語教育を検証できる
〇教育手法、労力、時間、コスト検証など、日本語教育における遠隔授業の課題を、委員会と実践検証を通してクリアにすることができる
〇それによりノウハウも蓄積され、成果を広く共有することで、当分野の新たな教育スタンダードの確立に期待できる

2.with Covid-19（2021 - ）

以上の期待される課題解決を目指し、2023 年度までに日本語教育による効果的な遠隔授業モデル構築を行っていくこととする。

２．2021 年度活動報告

― 教員へのアンケート調査 ―

２-１．2021 年度に行った活動について

遠隔授業のモデルを新たに構築するにあたり、本校で 2020 年度から 2021 年度にかけて行ってきた遠隔授業及び作成教材を見直し、その課題や改善案を明らかにすることを目的に、以下のような調査（一部計画）を行った。

＜調査内容＞
１．「学内教員アンケート」実施、分析
２．学習者（2021 年度 4 月期本校日本語科の学生）への調査計画
３．『日本語教育の参照枠』の分析

１．のアンケートを、2021 年 12 月本校専任講師 17 名に Google forms で行った。本校では、2020 年度から 2021 年度にかけて「予習動画」という 10 分程度の文型の意味などを説明する動画を 148 本（うち初級の内容は 118 本）、学習者はそれを予習として見た上で、Zoom によるグループレッスンに参加、予習してきた文型を使えるよう会話中心の練習を行った。その反転授業形式の遠隔授業を行う中で、教員が行ってきた工夫、難しいと感じた点、アイディアや提案など、今後の課題や方向性を考える上で貴重な意見を数多く得ることができた。詳しくは 2－2 で述べる。

２．については、2021 年度 4 月期の学生が全員入国し次第、調査を行う予定であったが、新型コロナ感染拡大のため、学生たちは未だ入国を果たせていない状況である（2022 年 2 月 13 日現在）。そういった状況下において今年度の学習を振り返ることは精神的に難しいだろうと判断し、入国してから、もしくは卒業前後に調査を実施するつもりで準備を進めている。この件については次回詳しく報告する。

３．の「日本語教育の参照枠（報告）」（2021 年 10 月 12 日文化審議会国語分科会）が文化庁 HP にて公開された。今後国内外の多様な日本語教育の現場において日本語教育の共通の指標として参照され、日本語教育の現場で用いられることになるであろうこの「日本語教育の参照枠」の視点を外しては、新たな授業モデルは作成できないと考え、まずはこれをよく理解することに努めた。その一環として本校のオリジナルテキストである『文化初級日本語Ⅰ・Ⅱ改訂版』を学ぶことでどういった Can do を達成することができるか調査し、「文化初級日本語Ⅰ・Ⅱ　Can do 一覧」（この後「一覧」）を作成した。また、この一覧を利用し CDS（Can do statements）を達成するため、行動中心アプローチ（何らかの行動ができるようになることが第一の目標であり、そのために必要な表現や語彙を都度指導するスタイル）に沿った教材を作成した。今後、これまで作成してきた文型積み上げ型（文法を理解した上で使えるように練習していくスタイル）の教材と行動中心アプローチに沿った教材の長短所を見極め、遠隔授業のサイクルにどのように取り入れれば効果的か検討する予定である。

２-2.「学内教員アンケート」実施報告

２-2-1．調査概要

本調査は、文化外国語専門学校の各教員が 2020 年から 2021 年にかけて、予習動画を利用してどのような反転授業を実施したか、また、遠隔授業全般においてどのような教育活動を実施したかを明らかにし、「アフターコロナ」を見据えた遠隔授業モデルを構築する際の参考とするために行ったものである。具体的には、次の A. ～D. の４つのトピックを設け、自由記述形式によるアンケート調査を実施した。実施方法には Google forms を使用し、日本語科の授業を担当している常勤講師１７名全員から回答を得ることができた。

１．今年度（2021 年４月から６月）の予習動画を使った反転授業について
　A.　初級の予習動画について
　B.　初級の反転授業について

２．遠隔授業全般について
　C. 遠隔授業における教育活動（授業・課題・教材・学生指導など）について
　D. 学生のことについて

A. については、2020 年および 2021 年の４月に学内の教員で分担して作成した予習動画について、動画の構成や内容、デザインの工夫などについて調査した。教師の側から見て、良いと思われる予習動画の特徴ついても調査し、予習動画作成時に配慮すべきことやより良い動画作成に向けての改善点を得ることができた。B. については、2021 年４月から６月に文化外国語専門学校の日本語科で初級の授業運営を担当した教員のみにアンケートを実施し、この期間の授業運営や、１つの文型を学習するための「予習動画」、オンライン会議ツール（Zoom）を利用した「同期型授業」、同期型授業後の知識の定着を図るための「課題」のサイクルについて適当だったか、「予習動画」を作成した際のパワーポイント資料の内容を同期型授業時に各教員がどのように扱っていたかを調査し、「予習動画」や「課題」といった非同期型授業と同期型授業の有機的なつながりについて、考察した。また、教師の側から見た反転授業の学習効果についても、教師側の気づきをもとに考察した。

C. と D. については、2020 年から 2021 年 12 月までの遠隔授業の取り組みを対象とし、全ての教員に回答してもらった。C. については、各教員が実践し、工夫できたことや困難を感じたことを、D. については、日々の遠隔授業の中で、学生が感じたと思われる負担や、学生のモチベーションの維持のために行った工夫を、それぞれ記述してもらい調査を行った。

各質問内容については、参考資料「学内教員アンケート質問一覧」を参照いただきたい。

２-2-2. 調査結果及び考察

ここでは、アンケート調査によって得られた回答をＡ～Ｄの４つのトピックに分け、その結果から考えられることについて報告する。なお、各トピックで紹介する回答は内容ごとに分類し、一部抜粋または要約している。括弧内の数字は回答者数を示している。但し、一人の教員が、複数の内容を記述している場合もあるため、数字の総数は全回答者の数と一致しない。

Ａ．初級の予習動画について

質問１．（一部、質問３．その他自由に意見を書く質問の回答も含む）

「文型の導入」「意味」「使い方」「文型の作り方」の順で構成される動画の構成や動画内容についてどうだったかを記述してもらったところ、次のような回答が得られた。

【構成と内容の両方について】

統一性（１３）

・統一されていてよかった。

【構成について】

構成の要素の再検討（８）

・「練習」「宿題」の有無とその量について検討が必要だ。
・「使い方」「意味」の解釈が作成者によって異なっているので全体で確認が必要。
・最初に目標や動機付けが必要ではないか。

構成の順序の不統一（６）

・文型によっては必ずしもこの順でなくてよい。
・作成者による若干の違いは、学生の慣れによる「飽き」を軽減するのではないか。

【内容について】

同期授業とのつながり（３）

・Zoom 授業とのつながりを考える必要がある。
・「よく復習してください」などのメッセージを入れて授業へのつながりが感じられる作りを工夫したらよい。

動画で伝える内容（５）

・文型の形ではなく、どんな場面でいつ使うのかを示すような内容にしたほうがいい。
・教師の顔や発音している様子を映したほうがいい。

動画の構成や動画内容については、ある程度統一されている点を評価する意見が多く見られた。一方で、文型によっては構成の順番を変更することを考えてもいいという意見や、統一した構成にはなかった「練習」「宿題」を設けるかどうか、設けるならば同期型授業とのつながりを意識し検討する必要があるという意見が得られた。特に動画の内容については、予習動画の役割を明確にすること、つまり、どこまでを予習動画が担い、どう同期型授業につながるかの検討が必要だという意見や、予習動画の「意味」「使い方」の各項目で、何を説明するのかの共通見解が必要だという意見があったほか、動画を作成した各教師の工夫として、練習や同期型授業までに考えておく「宿題」が含まれている動画もあり、その有無や量、内容について疑問を感じた教師もいたようである。予習動画による非同期授業の部分で、どのような学習効果を期待するのか、また同期授業とのつながりを明確にしたうえで予習動画の構成や内容を考える必要があるだろう。

質問 2.　（一部、質問 3. その他自由に意見を書く質問の回答も含む）

動画のデザインやナレーション、動画の作成方法についてどうだったかを記述してもらったところ、次のような回答が得られた。

動画のデザイン（１７）

・文字色やアニメーションの種類など、統一感があり、見やすかった。
・フォントはＵＤデジタル教科書体などの見やすいものに変更したほうがよい。
・文字色に原色を多く感じるので、マイルドなものがよい。
・ルビのサイズが大きいと感じる。
・スライド画面のサイズを１６：９にしたほうがいい。
・デザインにはこだわらず、シンプルなものがよい。

動画のナレーション（６）

・ナレーションは、もっとインタラクティブにしたほうがいい。
・ナレーションは、もっとシンプルなほうがいい。
・初級の初めは、母語を活用したほうが良い。
・動画に字幕がつけられたらよい。
・予習動画をどのように使って学習するかを説明するための動画を作ったほうがよい。
・話すスピードに個人差があるが、そのほうがいいと感じる。

動画の作成方法について（６）

・ＰＰＴ以外のソフトウェアや方法でも動画資料は作れるので、他の方法も検討したほうがよい。
・ルビやナレーションの付け方など、訂正や改訂のしやすさを考えた作成方法にしたほうがよい。
・教師間で動画や動画資料のチェックをし合うことで、完成度が高まった。
・実際に動画を使った学生にアンケートを取って、改善したい。

この結果から、よりよい動画を作成するためには、統一したルールを良いものに見直すべきであり、具体的には、フォントやルビの大きさ、色づかいについての改善点を得ることができた。また、教材の改訂のしやすさを考えた動画およびスライド作成方法を今後検討するべきだという意見があったが、これは、本校の特徴であるチームティーチングによる教育活動の持続性を考える上でも必要な視点であろう。動画のデザイン部分の統一した規則だけでなく、動画作成のために必要なプレゼンテーション資料の作成についても、可能な範囲で統一できる部分はルール作りが必要であると思われる。

また、視覚的なわかりやすさだけでなく聴覚的なわかりやすさや工夫を求める意見もあり、具体的には、教師のナレーションについて、インタラクティブさをより追求したほうがいいという意見や、聴解に不慣れな学生に配慮した動画作りや活用のありかたを検討すべきだという意見を得ることができた。本事業では、初級レベルの学習者を想定した検討をしていくが、初級レベルの学習者の中には聴解が苦手である学習者も少なくない。先ずは、学習者の聴解力を補うための工夫を意識し、学習者の聴解力がある程度ついてきた段階で聴解力を養うための工夫をしていくというふうに、段階的な仕掛けを考えて教材を作成することも大切であると考える。動画を視聴し学習することの先にある「身につけてもらいたいこと」を意識した動画作成が必要だろう。

質問４，５

本校で作成した初級の予習動画のうち、良いと思うものとその理由についても回答してもらったところ、「動画のわかりやすさ」「動画の内容や作成方法に工夫がある」と感じる動画についての記述が多く見られた。具体的には、次のような意見が得られた。

【動画のわかりやすさについて】

説明のわかりやすさ（８）

・文型の細かいポイントや気をつける点が分かりやすい。
・コンパクト、端的、シンプルにまとまっている。
・説明が難しい項目をわかりやすく説明している。

使用する場面のわかりやすさ（７）

・文型の使用場面が理解しやすい。
・使用するイラストを厳選して選び、わかりやすくしている。
・例文やその示し方がわかりやすいものになっている。
・意味が分かりやすい。
・「使い方」でコミュニケーション上の機能を説明しているもの。

【動画の内容や作成方法の工夫について】

既習項目の利用（４）

・既習項目が効果的に使用されているもの。

・前のスライドで押さえた内容を違う形で再度押さえている。
・意味導入のしかたに工夫がある。（１つ目の導入の情報を２つ目の導入に利用している、学習者の思考をコントロールして理解を導いている。）
・教科書の CD 音声を使って考えさせる部分を作っている。

ナレーションの工夫（４）
・ナレーションに臨場感があり、楽しく視聴できる工夫がある。
・ナレーションが明るい声で聞き取りやすい。
・学生に語り掛けるような話し方をしている。
・「練習」のキューを、全て文字で見せるのではなく、ナレーションだけで示している。

アニメーションとのタイミング（２）
・視覚情報の提示とナレーションやアニメーションのタイミングがいい。

自分で練習できる工夫がされている（２）
・「練習」を設けて、学生が自分で練習できるようになっている。
・何度も見て自分で覚えるような文型項目と動画は相性がいいと思う。

視覚的な工夫（１）
・誰のセリフかが分かるように例文の文字を色分けする工夫。

以上の結果から、本校の教員がよいと感じる動画の特徴として次の５つの点が挙げられる。
①教材としてコンパクトでありながら、その文型項目を学習する際の要点がしっかりまとまっていること。
②場面やコミュニケーション上の機能を意識した導入や例文の使用によって、実際の使用場面を意識して動画が作成されていること。
③既習項目を効果的に使いながら動画が作成されていること。
④視覚教材であるが、聴覚にも訴えるような工夫が施されていること。
⑤動画の中であっても、学生が、「教師とつながっている」と感じられる「ライブ感」を大切にしていること。

③については、本校の特徴である直接法による日本語指導に拠る部分が大きいと思われる。質問２．で「（学生の）母語を活用したほうがいい」という意見も見られたが、できる限り訳語に頼らず、既習項目の知識を積み上げていきながら、②でまとめたような場面やコミュニケーションを意識した授業カリキュラム及び動画教材の作成を目指すことができれば、より実践的な教育活動が可能になると考えている。

予習動画について、調査結果及び考察を総括すると、「非同期型授業である予習動画の役割と同期型授業の有機的なつながりを検討し直し、予習動画が果たすべき目的と内容を精査すること」「学習者にとってより負担なく学習しやすい教材となるように改善していくこと」「チームティーチングの現場において改訂が持続的に可能となるようなデジタル教材の作成方法について検討すること」の３点を意識しながら、遠隔授業モデル内の予習動画教材の検討を行っていくことが必要であると考えている。

B.　初級の反転授業について

質問６，７（一部、質問 12．その他自由に意見を書く質問の回答も含む）

2021年４月～６月に実施した初級クラスの反転授業について、１日のスケジュール（２時間の同期授業と３時間の非同期の自習）や予習動画視聴、オンライン授業、課題学習からなる１回の学習サイクルについて意見や改善点を質問したところ、次のような回答が得られた。

【同期型授業（Zoom による授業）について】

学生側の立場から（６）

・学生はよく予習をしてオンライン授業に出席していた。
・オンライン授業は、時差、通信状況、集中力などを考慮すると、１日２時間が限界ではないか。
・オンライン授業が２時間なのは仕方ないが、学生はもっと授業したかったのではないか。

教師側の立場から（４）

・ゼロ初級クラスは、学習項目が定着せず、２時間のオンライン授業も精一杯だった。
・授業は様々な練習ができてよかった。
・教師の裁量に任される部分が多く、自分の練習が良いか、学生にとって身に付いているか不安だった。
・学生の予習状況がよりわかると授業準備がよりしやすい。

【非同期型授業（予習動画、課題）について】

学生について（４）

・学生がきちんと課題をやっていたかがわからなかった。
・課題が３時間で妥当かどうかは、課題内容によると思う。余裕がある学生には課題以外にも教材を紹介した。

学習サイクルの構築（５）

・オフラインの時間の使い方の丁寧な指導が自律学習につながる。
・しっかり課題や予習ができる学生ならよいが、そうでない学生にとっては難しい。

・学生がシンプルな動作で自習教材が使えることが必要だ。
・サイクルについていくのが難しい学生には、「補習」時間を別途設けて対応した。

課題の内容（４）
・自分でアウトプットできるような練習（CALL 教材のようなもの）を予習動画につけたらどうか。
・課題の内容については、授業や課単位でなく通して復習できるような教材があるとよい。
・学生の発話不足を感じるので、課題の中に例文や本文を読むような課題を出すとよいのではないか。
・文型を使って文を作る復習をさせたが、スモールステップでも自信が付く内容になったのではないか。

【全体を通して】
・「反転授業」の定義を教員全体で共有する必要がある。
・いきなり５時間の Zoom によるオンライン授業が始まるより、授業に慣れるいいペースだったのではないか。
・授業から課題への橋渡しや棲み分けの検討が必要。
・テストなどの「評価」がサイクルに入っていなかったことについては、検討が必要だと感じる。

同期型授業については、学生の予習状況が良好だったという意見や、２時間のオンライン授業がさまざまな条件を考慮して妥当だったのではないかという意見が多く上がった。調査対象となる期間の実践では、２時間の Zoom を用いた同期型授業と、３時間分の非同期型授業（予習動画の視聴と、Zoom 授業後の課題）のサイクルが約２か月続いたが、学生にとってはこの授業配分が遠隔授業を続けやすいバランスだったのではないかと思われる。

非同期型授業については、学生の課題学習の状況が見えにくかったという意見や、課題学習の内容は検討の余地があるという意見が見られた。そして全体を俯瞰しての意見として、反転授業そのものの定義や、授業から課題への流れの検討の必要性、評価をサイクルに取り入れるかどうかなど、反転学習を取り入れた学習サイクルそのもののあり方についての検討不足を指摘する意見が挙がった。当時は、よりよい予習動画を作成することや学生対応に追われ、予習、授業、復習そして評価がそれぞれどのような目的を持ち、どうあるべきかの全体像や指導内容を十分に検討、共有できずに授業運営をしていたことがあった点は反省すべきだろう。「教師の裁量に任されていて不安だった」という意見も、それを反映しているのではないだろうか。

質問 8，9（一部、質問 12．その他自由に意見を書く質問の回答も含む）

「予習動画」の項でも述べたように、遠隔授業における非同期部分と同期部分の各役割やつながりを明確に決めていなかった中で、実際に各教師が Zoom による同期型授業内で予習動画の PowerPoint 資料（以下、「PPT 資料」）をどのように扱っていたかとその理由についても調査したと

ころ、初級クラスの授業を担当した９名の教員全員が「PPT 資料を一部見せるなどして利用していた」と答えた。具体的な利用の仕方や、そのように利用した理由は以下の通りだった。

【具体的な利用のしかた】

予習動画の内容の確認（４）

・授業の導入部分で、予習動画の内容を復習として扱い、その後練習に時間を使った。
・予習動画で使われていた例文の一部やイラストを使い、例文の意味を確認した。
・予習動画で使われていた語彙やイラスト、文法用語の理解を確認するのに使った。
・授業のはじめに予習動画の PPT を使って練習したり、意味や形を確認したりした。

宿題の確認（１）

・「宿題」があるときに、その宿題のチェックをするために利用した。

【PPT 資料を授業内で部分的に利用した理由】

学生の理解（６）

・同じ例文やイラストを見たほうが理解しやすいだろうから。
・動画内の内容で疑問があれば、解決しないと先に進めないと感じる学生もいるだろうから。
・予習をしてきた学生にとってはより理解が深まり、予習をしていない学生も授業後に予習動画を見直し復習しやすいと思ったから。
・授業でそのままＰＰＴを使うと、学生が「動画を見なくても大丈夫だ」と誤解してしまうだろうから。
・予習動画以外の用例も提示したほうがいいと思ったから、部分的な使用に留めた。

授業時間の有効利用（６）

・利用することによって、学生がちゃんと予習動画を見たか確認できるから。
・授業時の意味導入の時間短縮ができるから。
・予習をしている前提であっても、形や意味の確認は簡単にしたほうがいいと思ったから。

これらの結果から考えられることは、第一に、PPT 資料を部分的に利用することで、教師は非同期型授業と同期型授業につながりを持たせる工夫をしていたのではないかということである。つながりを持たせることで、同期型授業の中で学生の予習状況、具体的には、何がどこまで理解できているかを確認し、予習動画で学生が学習した知識の理解を深めようとする狙いがあったのではないかと思われる。

また、学生の予習時の疑問に答え、学びをフォローする場として同期型授業の時間を利用している教員もいたことから、非同期型授業と同期型授業のそれぞれの役割の意識を学内教員が共通して持つ必要性も感じられた。

質問 10，11（一部、質問 12．その他自由に意見を書く質問の回答も含む）

実施した反転授業のサイクルで効果的だと感じたことと、効果的ではないと感じたことについて調査したところ、次のような回答が得られた。

【効果的だと感じた点】

学習者の自律的な学びの促進（４）

・学生は学習サイクルを繰り返す経験ができる点。学生が自律学習のコツをつかめたのではないか。
・学生も予習をすることで、質問や疑問を持ったうえで授業を受けることができる点。
・教師の質問に答えられることで、学生にとって得意な気分になれる点。予習した内容を授業で確認する際に、学生の表情を見て感じた。

同期型授業の時間の有効活用（９）

・通常の授業より練習がたくさんできた点。
・動画の復習から始める流れで、授業に入りやすかった点。学生の理解が早かった。
・１クラスの人数が４～５人と少人数である点。一人ずつの発話がしっかり聞けてよい。
・予習したことを使いながら、授業で作文や自分のことを話す練習が効率よくできる点。
・ポイントを絞った濃い内容の授業ができる点。

【効果的でないと感じた点】

自律学習の指導の難しさ（５）

・学生のレベルや特徴によって、予習動画を見て学習するのが自律的な学習サイクルが難しい学生に対して指導するのが難しい点。

以上の結果から、反転授業の効果については、大きく３つの意見が得られた。

①予習動画によって先取り学習をしてもらうことで、授業時間の練習や活動の量や質の向上が期待できる効果
②反転授業を取り入れていない従来のカリキュラムより学習サイクルが明確で、学生に自律学習が促せる効果
③授業内容の理解が進みやすく、結果的に学習意欲や自信に繋がる効果

特に③については、自律的な学習サイクルを継続させるためには重要な要素であると考えられるため、実際に今年度の反転授業を受けた学生の意見も参考にして検討していけるとよいと思われる。

一方で、学習者の日本語のレベルや持っている学習ストラテジー、特徴や個性によっては、自律学習に依存した反転学習のサイクルをうまく取り入れられない学生像も想定できる。そのような学生に対し、遠隔授業下であっても手厚い指導やサポートをしながら反転学習のサイクルの中で学習が継続できるようなモデルの構築が望まれる。

本校で実施した反転授業について総括すると、第一に、同期型授業・非同期型授業のそれぞれの特徴を理解した上で、「予習動画」と「同期型授業」の関係性や内容だけでなく、ともにサイクルを構成する「課題」とテストや自己チェックなどの「評価」の役割とつながりを十分に精査することが必要である。その上で、内容の充実した反転授業を遠隔授業として実施することを目指した具体的な授業モデルや、学習者のレベルや特徴に配慮しながらも学習者が自律学習を達成できるような仕掛けを検討する必要があるだろうと思われる。

C．遠隔授業における教育活動（授業・課題・教材・学生指導など全て）について

質問 13.

まず、遠隔授業で行ってよかったと思う教育活動や教材としては、オンラインサービスを利用した教材、ゲーム、相互にコメントをつける活動、共同編集、自宅にある物の紹介などが挙げられた。具体的には下記のような回答が得られた。

オンラインサービスを利用した教材（６）

・Jamboard での動詞のグループ分け、後件作成練習、並べ替え練習
・Quizlet で作成した漢字のカード
・グーグルスライドで作成した自他動などの自習用教材
・Padlet で作成した語彙練習用教材

ゲーム（４）

・ブレイクアウトルーム（以下、BOR）を自由に動く練習として仲間探しゲーム
・Google スプレッドシートにすごろくを取り入れたすごろくゲーム
・Jamboard を使ったしりとりゲーム
・「ています」を使ったジェスチャーゲーム

相互にコメントをつける活動（３）

・初級Ⅱ・中級Ⅰの作文活動で、清書をクラス全体で共有し、Google ドライブのコメントをつける機能で良いと思う部分にコメントを書き合った。
・Padlet や Google スライドを使い、作文や写真、動画を気楽にシェアし、コメントをつけ合った。
・Padlet を使って、夏休みの日記を SNS のように書かせた。動画や音声などいろいろ使い、学生同士でコメントを書いて交流できたようだった。

共同編集（３）

・共同編集をして学生がその場で一つのまとまった文章を作り上げた。
・スライド１枚ずつをグループに割り当てて、要旨や考えなどをまとめた。あとでクラス全体でシェアする

時に見やすかった。
・学生が BOR でシートなどを共有して話し合いなどを進める活動をした。

自宅にある物の紹介（２）
・形容詞＋形容詞の練習として「赤くて四角いもの」というお題を出し、部屋の中にあるものを紹介してもらった。
・自分の部屋にある物を一つ紹介する活動をした。

以上の回答から、遠隔授業を対面授業に近づける、または各種機能を利用して授業活動の効率を高める工夫や、遠隔授業ならではの利点を生かす工夫が為されていたことがわかった。回答にあった活動自体はこれまでの対面授業でも行われてきたものだが、遠隔授業では下記のような利点があると考えられる。
①複数人による共同編集がしやすい。
②対面授業では教室の座席の関係で、学生の成果物をクラス全員で一斉に見ることは難しいが、遠隔授業では画面共有や資料のリンクをシェアするなどすれば容易である。
③自宅での遠隔授業は学生や教師の生活空間に存在する物（レアリア）を授業で扱いやすい。

質問 14.
次に、遠隔授業でやりやすかった教育活動は何かという問いには、机間巡視、一対一での指導、インターネット上の資料やデータ化された資料の共有、空間的な制約といった視点からの回答が得られた。具体的には、下記の通りである（質問 13 と重複する回答については省略した）。

机間巡視（４）
・教師が教室の机間巡視で見るより Classroom（以下、CR）で作文などを見たほうがしっかり見られるし、直しやすい。
・学生がドキュメントにまとめている要約や作文をリアルタイムで全員分見ながら、修正するべき点を指摘できる。机間巡視でも可能だが、全員または多くの学生が勘違いをしている点などは把握するのが速い。

一対一での指導（３）
・一人ずつの BOR にして、教師が巡回した。周りがいないほうが学生が質問しやすそうだった。
・作文を書いている作業中などに、他の学生に気づかれることなく、コメントしたり、間違いを訂正したりできる点。

インターネット上の資料やデータ化された資料の共有（１２）
・動画、写真、サイト、聴解の音源などを簡単に視聴させることができる。

・学生の発表を録画しやすく、共有しやすい。
・指示やタスクを文字情報でも確認できるので漏れが少ない。
・教室のスクリーンに映すより、各自がパソコンで見たほうが見やすいと思われる。
・漢字の授業で、学生がノートに書き写す際に間違いが少なくなったと感じた。

空間的な制約（３）
・パソコンを使う際に、対面授業と違って教室予約の必要などの制約がない。
・会話練習の際に、コロナウイルスの感染リスクを気にせず行える。

以上の回答から、教師が授業中に行う様々な行為について、オンライン上で完結できる効率のよさや利便性の高さにメリットを感じていることがわかった。机間巡視や資料の共有では、学生の個別作業中の状況の把握や、様々な種類の資料を示すのにかかる時間が短縮できる。ただし、学生の状況の把握については、次の質問 15 では違った視点からその難しさが指摘されている。また、一人ずつの BOR に分けて行う一対一での指導や、各自のパソコンで画面共有された資料を見るメリットは、周りの状況に左右されにくく集中しやすくなるという点にあると思われる。

質問 15.
上記のようなメリットがあった一方で、遠隔授業でやりにくかった教育活動としては、漢字、会話の２つに言及する回答が多かった。また、その２つも含めた様々な場面で、学生の状況把握に関する問題点が挙げられた。そのようなやりにくさを感じた際にどのような工夫を行ったのかについても回答が得られた。

漢字（９）
・字形、書き順などの書き方の指導
・文字を練習させ、習慣化させるのが難しかった。

→工夫した点
・対面授業の際に、手書きでリライトさせる機会を増やした。
・対面授業の際に、クイズを行いフォローした。
・画面上で描画して書き方を示した。

会話（11）
・BOR でペア会話練習を行うと、ペアの組み替えに時間と手間がかかる。
・音読をさせる際、マイクを全員がオンにしていても教室で行うほどミスは発見できない。
・BOR 中は画面共有できないため、複数のトピックについて話してもらいたいことがあるときなどに学生に見せながら行うことができない。

→工夫した点
・なるべく多くの BOR を回るように意識した。
・BOR で行うことの指示を写真に撮ってもらってから開始するようにした。
・事前に国内の学生にはプリントを配布し、海外の学生にはプリントを印刷しておくよう指示した。

学生の状況把握（９）
・学生が問題などに取り組んでいるときの進度が把握しにくい。
・学生がどのように読んでいるか、メモなどを書いているのかいないのか、何を書いているかが把握できない。
・BORを開始後、教師側は入室した一つのBORの様子しか把握できないため、全体の様子がわからない。
・教材が多い場合、指示が通らない。

→工夫した点
・段階的に時間設定をしてコントロールした。
・細かく区切ってスライドなどを使いながら、学生の理解度を確認した。

上記以外の回答には、「対面授業であれば教師の動作や周りの学生の様子を真似して授業についてこられる場合があるが、それが遠隔授業では難しい」、「何ページを開くか、どの資料を見るかなどの指示が通りにくい」というものもあった。

以上の回答からは、遠隔授業には質問 14 で挙げられたようなメリットがある一方で、対面授業では不自由なく行えた作業や授業活動が物理的、技術的な面で困難になっていることがわかる。具体的には、学生の状況把握については、次の２点にまとめられる。

まず、学生が各自のノートなどに書き込む、文章を読む、問題を解くなどの作業は、カメラの画角の中に全体の様子が映らないため、物理的に把握が難しい。また、BOR でペア活動などをする際に教師は一度に一つの BOR にしか入室できないため、クラス全体を同時に俯瞰することに技術的な困難さがある。質問 14 ではリアルタイムで進捗が把握できる活動などを行う際にはメリットがあることがわかったが、一口に「学生の状況把握」と言っても活動の内容によって向き不向きがあると言えるだろう。

また、これらの困難を乗り越えるために様々な工夫が行われていたものの、決定的な解決には至っておらず、教師側が感じているもどかしさも窺えた。今後、このような遠隔授業の弱点とも言える点を十分に共有、検討し、授業の在り方を考えることが必要であると考えられる。

質問 16.

次に、遠隔授業や教材作成で使ってみてよかったアプリや使ってみたいアプリを、使用例と共に挙げてもらった。回答をアプリの利用目的によって分けると、以下の 3 つにまとめられる。

授業での解説や答え合わせに利用（３）

・PDF を「Kami」で表示し、読解の解説や答え合わせを行った。
・「Adobe Scan カメラ」で教材を撮影して取り込んだ。また、学生が手書きの成果物を送信する際に使用してもらった。

予習や復習のための自習用教材の作成（３）

・「Book Creator」で教科書の本文や例文、それらの音声、文法の各国語解説を一つにまとめたものを作成した。
・「Padlet」に参考となるウェブサイトをまとめて、後から見られるようにしたかった。

クイズ形式での語彙練習に利用したい（５）

・「Quizlet」「Kahoot」などを使ってクイズ形式で語彙の練習をさせたい。

対面授業と比べて、遠隔授業では様々なアプリやサービスの利用がしやすいと思われる。今回得られた回答にも遠隔授業での不便さを解消したり、学生が効率よく自習を進めたり、楽しんで練習をさせたりしたいといった目的に応じて、教師が適したツールを利用、または利用を検討していることがわかった。

質問 17.

このセクションの最後に、遠隔授業でやってみたいと思う教育活動のアイディアを挙げてもらった。

交流活動（15）

・学内の留学生や日本人学生との交流会を行う。
・ゲストスピーカーを読んで日本文化などについて話してもらう。
・学生が興味のあることや場所について紹介し合う。

教員による学校内外の案内（３）

・学校内をオンラインで案内する。
・校外学習に参加できない海外の学生向けにライブ配信する。

この問いには上記のように、何らかの交流活動を行いたいという回答が最も多かった。コロナ禍により対面での交流やイベントの実施が大幅に制限されてきたことから、学生同士、または外部のゲスト

スピーカーらとつながりを持たせたいという思いを持っている教員が多いのではないかと思われる。

D．学生のことについて

質問 18.

次に、学生のモチベーションの維持や達成感を持たせるために教師が工夫した点や苦労した点について、回答を見ていく。

まず、教師が感じた苦労した点については、以下のような回答が得られた。

苦労した点（４）

・精神的・肉体的に参ってしまう。
・感情が伝わりにくく、信頼関係が築きにくい。
・当初テストをオンラインでは難しいと思い、やっていなかったので、テストをやることになった際、ナーバスになる学生がいた。
・教科書がなく、CR のどこに何があるか整理できない学生がいた。

苦労した点についての回答数自体は少なかった。しかし、慣れない遠隔授業によって、学生のモチベーションの低下を感じている教師は少なくないようだった。次の質問 19 にも「学生にどのような負担や心配事があったと思うか」という質問があり、そちらに回答が細かく書かれているため、そちらで詳しく考察したいと思う。

次に、教師が工夫した点について、大きく分類すると「授業中」と「授業外」での工夫が見られた。「授業中に工夫した点」では、以下のような意見が見られた。

【授業中】

評価をする（３）

・できるようになったこと、まだできてきないことをきちんと評価する。
・「海外にいてもちゃんと国内の学生と同じくらい上手になっているよ」と意識的に褒めるようにした。
・学生の発言や解答に対して肯定的な反応を意識的に、若干オーバーに表現したり、具体的にいい点をあげたりした。

海外学生への気遣いや配慮（２）

・「海外学生に、この例文は向いていない」ということにならないように配慮した。
・教材内の国内学生向けの文言や指示を書き換えた。

その他

・目先の変わったことをする。

・学生が手持ち無沙汰にならないように気をつける。

特に多かった回答としては「評価をする」ことを意識していたという回答だ。中でも肯定的な評価を意識して行っていたという回答が 2 件見られた。理由として、遠隔授業では、「どうしても感情が伝わりにくく、モチベーションの維持や達成感を持たせるための教師の働きかけが、効果を発揮しにくかった」という回答だった。このように遠隔授業の特性である感情の伝わりにくさから、学生が不安になったり、学生と教員との間の信頼関係が築きにくくなったりしている。これらの不安を解消するために、何ができるようになっているか、具体的に特に、肯定的な評価を意識していることがわかる。また、動きの少ない遠隔授業が退屈にならないような工夫もしているようだった。

教科書や活動内に書かれている「日本では～」のような指示文を見て、「今海外だから日本のことはわからない」とモチベーションを下げないために、指示文や例文を書き直すなどの配慮をしていることもわかった。これらのことから、教師は通常の対面授業の時よりも気を配りながら授業をしているようである。学生側からはどのように受け止められていたかわからないが、こうした配慮は少なからずモチベーションの維持に関係してくると思われるので、「オンラインベース」の授業を展開する際には、参考になることだと思う。

一方「授業外」での工夫点については、以下のような回答が得られた。

【授業外】

積極的な声かけ（６）

・授業外に学生と個別に話す、相談事や質問がないかなど積極的な声かけを行う。

丁寧な説明（１）

・授業のやり方を丁寧に説明する機会を設ける。

対面授業のときは、例えば廊下で会った時に、授業の休み時間に教師から声をかけに行ったり、学生側から声をかけられたりという時間があった。しかし、遠隔授業では、授業が終わるとほとんどの場合、Zoom を終了してしまうことで、学生と教師との繋がりがなくなってしまう。授業の内容以外にも不安に思っている学生がいることが、遠隔授業を続けていく上で見えてきたこともあり、悩みや質問などがないかどうか、教師から積極的に話しかける時間を設けている教師が多かったようだ。また、学期の途中で授業のやり方やメンバーを変更することもあり、それに不安を覚える学生もいたため、丁寧に説明するなど、学生の不安を取り除く声かけを意識して行っているようだった。授業だけでは学生と教師との信頼関係は築きにくいため、こうした時間を積極的に設けることは遠隔授業を進める上で特に重要なことではないだろうか。

質問 19.

続いて、教員が学生の様子から、コロナ禍や入国できないこと以外にどのような負担や心配があっ

たと感じたかと、それに対する対応についての回答を見ていく。

遠隔授業の受講における負担や不安（6）

・対面授業より教師に質問しにくいと感じる学生がいた。
・パソコンを通して大勢の人の声が聞こえてくることがストレスになる学生がいた。
・授業中および個別作業中に自分がしていることが正しいかどうかわからないことが不安だったのではないか。
・学生同士の交流が減ったので、孤独感を感じることが心配だった。
・自分の日本語のレベルを把握できず、自信が持てないと訴える学生がいた。

→工夫した点

・指示の明確化により注意して授業準備をした。
・いつでも聞ける雰囲気をつくった。
・どんな授業でも学生同士が話せる時間はできるだけ取るようにした。
・登校した際に学生にできるだけ声をかけるようにした。
・ホームルームの時間にアイスブレイクのためのゲームをした。

IT リテラシーや不慣れなオンライン学習環境に係る負担（6）

・オンラインで配信される教材の管理、整理ができない学生がいた。
・オンライン上での課題や予習などがうまくできない学生がいた。

→工夫した点

・どんな教材が CR 上のどこにあるか、できるだけ URL で示した。

設備および通信環境に係る負担（4）

・国によってはダウンロードできないアプリなどがあった。
・デバイスの仕様の違いがあり、説明が伝わらないことがあった。
・Wi-Fi などのインターネット環境が不安定なために授業に出られないことがあった。

健康上の負担や不安（3）

・目の不調を訴える学生がいた。
・健康面の特徴に関する申告があった学生と遠隔授業の向き不向きについて相談した。

→工夫した点

・ホームルームで時間が余ったときに目の体操をした。

CR から配信する教材はトピックごとに分けられているが、画面上でタイトルを目で確認する必要があり、紙の教材のように一目で内容を視認してめくりながら探す、といったことができない。ダウンロードして自分のデバイス上で管理するのも、ある程度のリテラシーが必要で、授業が進むほど増えていく教材を学生がどのように管理し扱っているのか教師側からは見えにくいという背景もあったと思われる。そのため、上記のように教材の所在や指示をより明確にすることは大事であり、また適切な量、タイトルのわかりやすさなども検討の余地があると思われる。

雰囲気づくりは対面授業においても当然重要だが、遠隔授業においては質問や気軽な会話のしにくさなどが考慮されていたことがわかった。

また、設備および通信環境に係る負担に関しては、工夫した点の回答はなく、「教師が使っている端末と学生の端末が異なり、説明が伝わらないことがあったが、学生のほうでうまく対応してくれた」「Wi-Fi の不調などで授業を受けられなかった際にもう少し厚い対応をしてあげたかった」といった回答があり、学生への対応に苦慮していた様子が窺えた。

そして、目の不調に関しては、遠隔授業を健康的に受けるために配慮する点を教員間で共有していく必要があると感じた。

質問 20.

遠隔授業においては、教室での対面授業と異なり、授業前後でクラスメイトと会話が自然に生まれにくく、友人関係を築くのは容易でなかったと思われる。そこで、学生同士の交流やつながりを促進するためにどんな工夫がされていたのか、またどんな工夫ができると思うかを聞く問いを設けた。

授業中に行った工夫

・教師が学生の共通項をメモしておき、折を見て伝えた。
・学生同士の共通項を見つけるワークを行った。
・ペアを偏りなく組ませた。
・クラスを混合して活動を行った。
・お互いの名前を呼ぶようにさせる、良いところを褒め合うなどして仲間づくりをした。

授業以外の時間での工夫

・授業時間外におしゃべりできる場を設けた。
・自己紹介を動画に撮り、オンライン上で互いに視聴し、コメントを伝え合った。
・長期休暇の宿題としてオンライン上で日記を書き、互いにコメントをつけ合った。
・SNS の利用した交流について紹介するのもよいと思う。

上記のように、授業内および授業外で工夫が見られた。授業内の工夫の中には、例えば教師が意図的にペア相手をコントロールしたり仲間意識が作れるように指示を工夫したりするなど、細かい配慮が感じられる回答があった。その一方で、あまりつながりを促す活動ができなかった、また、自由に

おしゃべりして良い時間を設けても率先してしゃべるタイプの学生がいないと難しいといった声もあった。また、授業外では、オンラインでおしゃべりできる場を設けることが複数のクラスで実施されていた。

このように様々な工夫がされていたことがわかったが、「学生同士のつながり」については日本語科全体で共通の課題としてはっきりと捉えられていなかったため、各教員または各レベルのグループでの工夫に留まっていたと思われる。今後、遠隔授業における課題の一つに位置付け、その解決策を検討していくことが必要である。

質問 21.

最後の質問として、上記以外に遠隔授業についての意見、提案、改善案などを挙げてもらった。

遠隔授業への前向きな意識

・今後も何らかの形で遠隔授業を取り入れられたらいい。
・改善しやすく、教師も学生も疲れない、持続可能な遠隔授業を考えたい。
・楽しいと思える、遠隔授業ならではの可能性をもっと考えたい。
・遠隔授業は、対面授業の形式にも生かせることが多くある。

授業目的と方法の再検討の必要性

・今後の遠隔授業の位置づけをどのように考えるのかは大きい課題だ。
・遠隔授業の教授法やツールを無目的に使うのではなく、どのような学生を育てたいのか、何のためにそれを教えるのかを考えた上で必要な方法を探るべきだ。
・コロナ禍前のやり方や教材を積極的に見直していく姿勢を全体で作っていく必要がある。

その他課題や改善案

・教師は学生ともっとコミュニケーションを取る時間をつくったほうがいい。
・グループによって、教師の交代の仕方などのルールが違ったため、良い方法を考えたほうがいい。
・PC 環境やスキルなど個人差が大きく、それに対応することを考えていると肝心の語学教育が疎かになってしまう。
・日本語力の問題で答えられないのか、機器の問題なのか判断がつかないことがあったので、いろいろなアプリや機能を駆使した授業より、結局はシンプルなものがいいのではないか。
・オンラインの場合は指名して学生が答えるにしても時間がかかり、どのコマもきつめに感じたため、もう少しゆとりのあるスケジュールで進められたほうがいい。
・技術的な説明が理解できないなど、教員側の IT リテラシーを改善したい。

この設問への回答には、今後も遠隔授業のメリットや可能性を考えたいという前向きな意見があった。一方で、コロナ禍以降の遠隔授業を一つの選択肢と捉え、教育目的に照らして改めてその運用方法を考え直すべきだという意見もあった。また、遠隔授業を行う上での課題や提案がいくつか挙げ

られた。

「オンラインベース」の授業を検討する上で、上記の回答にあるように「目的」をどのように設定するかは非常に重要だと思われる。オンライン上では効率性、利便性の高いサービスが数多く展開されており、ともすれば目的と手段が逆転しかねない。

また、遠隔授業に不可欠な IT リテラシーを、教員および学生にどこまで求めるのか、どのように習得を促すのかなども検討していく必要があるだろう。

（参考資料）学内教員アンケート質問事項

1. 今年度（2021 年 4 月から 6 月）の予習動画を使った反転授業について

A. 初級の予習動画について

Q1.

初級の予習動画は、「導入→意味・形・使い方の説明→（練習）→（宿題）→教科書の例文」という構成でした。構成や内容についてどう思いますか。ご意見やご提案、改善案などがあれば教えてください。

Q2.

初級の予習動画は、PPT で文字・色・フォントなどを統一したスライドを作成して、ZOOM で録画し、10 分程度の動画を作成しました。デザインや作成のし方についてどう思いますか。ご意見やご提案、改善案などがあれば教えてください。

Q3.

その他、初級の予習動画についてご意見やご提案、改善案などあれば教えてください。

Q4.

今まで見たことがある予習動画の中で「この予習動画いいな！」と思ったものがあれば、課と文型を書いてください。いくつでもかまいません。例）L9 文型 2～てください、L9 文型 8 までに

Q5.

Q4.で回答した予習動画が良いと思った主な理由を教えてください。

B. 初級の反転授業について

Q6.

初級の反転授業は主に、1 日 2 時間 zoom で授業、3 時間課題（予習動画＋練習問題集など）で復習というスケジュールでした。この時間やスケジュールについて、ご意見やご提案、改善案などあれば教えてください。

Q7.

初級の反転授業は主に「予習動画→zoom で授業→課題（練習問題集など）で復習」というサイクルで行いました。そのサイクルについて、ご意見やご提案、改善案などあれば教えてください。

Q8.

Zoom の授業で予習動画の内容（PPT）をどのように扱っていましたか。

Q9.
Q8.の回答のように扱った理由を教えてください。

Q10.
今年度の反転授業（予習動画→zoom で授業→課題）で効果的だと思ったことがあれば、自由に書いてください。

Q11.
今年度の反転授業（予習動画→zoom で授業→課題）で効果的ではないと思ったことがあれば、自由に書いてください。

Q12.
その他、反転授業についてご意見、ご提案、改善案などあれば教えてください。

2. 遠隔授業全般について

C. 遠隔授業における教育活動（授業・課題・教材・学生指導など）について

Q13.
予習動画以外にオンライン授業で行ってよかったと思う教育活動や教材は何ですか。
例）Jamboard でインフォメーションギャップの会話練習をした。

Q14.
オンライン授業でやりやすかった教育活動は何ですか。例）互いの作文（Google ドキュメント)を読み合い、同時に感想を書き込む。

Q15.
オンライン授業でやりにくかった教育活動は何ですか。また、その際工夫したことがあれば教えてください。例）漢字の書き順や字形の指導。小さいホワイトボードを使った。

Q16.
オンライン授業や教材作成で使ってみてよかったアプリや使ってみたいアプリがあれば、その使用例と共に教えてください。例）Book Creator でポートフォリオを作らせたい。

Q17.
オンライン授業でこんなことができればいい、やってみたいと思う教育活動のアイディアがあれば教えてください。例）日本人学生との交流会を行う。

D.　学生のことについて

Q18.

オンライン授業が続く中で、モチベーションの維持や達成感を持たせるために苦労した点や工夫したことがあれば教えてください。例）面談の機会を意識的に増やした。

Q19.

コロナ禍や入国できないこと以外で、学生にはどのような負担や心配があったと思いますか。学生の様子から気づいたことがあれば書いてください。またそのために何かしたことがあれば書いてください。例）パソコンの操作が苦手な学生に対して、マニュアルを作成し指導した。

Q20.

個人ではなく、クラスやグループで学ぶ際、学生同士の交流やつながりを促進するためどんな工夫をしましたか。または、どんな工夫ができると思いますか。例）zoom の授業の後すぐ「終了」しないで学生だけで交流する時間を設けた。

Q21.

最後の質問です。その他、オンライン授業についてご意見、ご提案、改善案などあれば教えてください。

３．まとめと今後の方向性

文部科学省から事業を受託し、遂行するうえで、主幹校である学校法人文化学園 文化外国語専門学校が、これまで行ってきた遠隔授業について振り返るところから、このプロジェクトはスタートした。2020 年から続く COVID-19 への対応策として取り入れられた遠隔授業は、今でも教育現場において実践されている手法であるが、今一度その実態を見つめなおすことによって、本プロジェクトの地盤を固めることができると考えたからだ。

まず、これまでに作成した教材を見直し、その過程で振り返りの観点を整理して、教師に対するアンケート調査に着手した。その結果、各教師が試行錯誤を繰り返して、より良い遠隔授業を模索していたことがよくわかり、多くの課題にも気づくことができた。質の高い遠隔教育のモデルを構築するために、今の日本語教育業界で語られる教育手法や教育観のうち、何を私たちの教育に取り込んでいくべきか。それらが「日本語教育の参照枠」「Can-do」という観点でオンライン教育を見直すことにつながり、さらに現在は参照枠や Can-do とより相性がいいとされる「行動中心アプローチ」による教育手法への転換も含めて、大きな可能性が広がっていることが確認できた。半年でこれまでにない教育手法を取り入れようと考え始めたことは、非常に大きい収穫であった。そして、学習者に対して実施したアンケート調査も今年度中には結果がまとまり、学習者が遠隔授業をどう評価したのか、学習者に何が起きていたのかがより明確になっていくであろう。これらの振り返りによって、プロジェクトを進めていく基盤が整備されたと言えるだろう。

さらに、3 回の実行委員会を通して、学外の委員から様々な視座を得ていることも見逃せない。外部の委員も試行錯誤を繰り返して遠隔授業に取り組んでいると聞いて私たちが励まされたり、もっと引いた目で検討すべき点が他にあるのではないかと指摘され、視野が狭くなっていることに気づいたり、外部委員の意見がプロジェクトの進む方向を適宜修正してくれている。現時点での大きな課題の一つも実行委員会で提示されたものだ。本プロジェクトでは、入学時期になってもまだ入国が許されず海外で勉強せざるを得ない学習者に対して 3 か月実施する遠隔授業のモデル化を進めているわけだが、そのゴール・到達目標をどう設定するべきかということの難しさに直面している。これを明確にしないと、新たなモデルが効果的かどうか問えなくなってしまう。モデルである 3 か月の遠隔授業を終えた学習者は、本学の通常のコースに取り込まれることを想定している。このコースは文型積み上げ式を軸にしているため、遠隔授業で行動中心アプローチを強く打ち出すことは、両者に大きいギャップを生じさせることになる。しかし、このようなゴール設定の課題は、どのような教育手法をとったとしても十分に検討しなくてはいけないことである。この課題がクリアされれば、効果的なモデルのイメージがより明確になるということでもあり、前向きにこの課題と対峙していきたい。

来年度は、遠隔授業モデルのゴール・到達目標を明確にし、それに沿った予習動画と遠隔授業で使用する教材データの作成・実証を繰り返すことでさらなる知見獲得を目指したい。さらに、遠隔授業モデルのサイクル全体を意識した調査や分析も欠かせない。学習者アンケートからは教材利用や自習の在り方の実態も得られるはずである。それらに自習システムやアプリケーションをどう生かすかという観点を加えて、学習者が学びたいと思えるようなサイクルを追求することが必要だ。

課題は多いが、教材作成チームも実行委員会も会を重ねることで建設的な意見交換ができるようになっており、来年度への期待は高まっている。課題を一つ一つ乗り越え、効果的な遠隔授業モデルの構築に向けて成果を積み上げていきたい。

日本語教育のための効果的な遠隔授業モデル構築プロジェクト
プロジェクトリーダー
西村　学
（学校法人文化学園　文化外国語専門学校　副校長）

2021 年度文部科学省委託事業

専修学校における先端技術利活用実証研究

日本語教育のための効果的な遠隔授業モデル
構築プロジェクト
事業報告書

学校法人文化学園 文化外国語専門学校

発行年月日　２０２２年3月１日
発行・編集　学校法人文化学園 文化外国語専門学校
〒151-8521 東京都渋谷区代々木 3-22-1
電話 03-3299-2011

本報告書は、文部科学省の教育推進事業委託費による委託事業として、学校法人文化学園 文化外国語専門学校が実施した令和３年度「専修学校における先端技術利活用実証研究」の成果をとりまとめたものです。